

please の解釈とアクセントの関係

The Pragmatic Interpretation of *PLEASE* : From the Perspective of Accentuation

有 田 由 紀 子

Yukiko Arita

1. はじめに

英語の文副詞 *please* は先行研究において、request (要求) の際の politeness marker と分析されてきたが、一見それに反するような例がある。

(1) Could you send up some champagne and strawberries, *please*? (Pretty Woman)¹

(2) Edward: Gentlemen? Would you mind leaving us, *PLEASE*?

Thank you.

Vivian: People always do what you tell them to do?

(Pretty Woman)

(1) は特別客がホテルのフロントでルームサービスを頼む場面、(2) は特別客が営業終了後のホテルのバーで、従業員達に出て行ってくれるように頼む場面である。(1) (2) とも *Could you...? Would you mind...?* といった丁寧な依頼を表す表現と共に *please* が使われている。しかし (1) の丁寧な依頼の解釈とは違い、(2) では *please* を使った文が命令のように解釈される。両者の違いは *please* のアクセントの有無である。² 本研究では、このアクセントの有無の違いが、話し手の要求の丁寧さと強さに関係していることを主張する。

まず、第2節で Arita and Kusayama (2002) で提案された *please* の語彙的意味を概観し、次に第3節で、アクセントに焦点を当てた *please* の語用論的意味を

考察する。第4節では、*please* の解釈の多様性に関して、要求する権利という視点からの分析を試みる。

2. *please* の語彙的意味

Arita and Kusayama (2002) (以後 A&K) は、同様の文副詞である *kindly* との比較から、*please* の持つ語彙的意味を、「話し手が主観的に判断した利益が含意されている文脈での要求 (request) である」と主張している。その根拠を順にみていきたい。

2.1. 要求の文脈

まず *please* の使用環境について観察するために次の例を比較してみよう。

(3) a. Bring me a towel, *please*.

b. *Please*, can you open the window?

(4) a. * He ate more pudding, *please*.

b. * I promise you can have more pudding, *please*.

d. * Do you want to come to a party, *please*?

(Stubbs 1983:72)

(3) はどちらも要求の文脈で、それぞれ、(3a) タオルを持ってきてくれるように頼む、(3b) 窓を開けてくれるよう頼む際の表現である。これらの表現は問題なく *please* と共起可能である。一方で (4) はどれも要求の解釈はされず、この場合 *please* とは共起できない。このことから、*please* は直接的であれ間接的であれ、要求の文脈でしか使われないことが分か

る。

(Geukens 1978:270)

2.2. 利益の方向性

前節で、*please* の使用には要求の文脈が必要ということを見た。しかし、要求の文脈というだけでは、次の例のように *kindly* との違いを説明できない。

- (5) a. (*Please /Kindly*) open the door.
 b. Will you (*kindly /please*) address a few words to the new students? (Quirk et al. 1985:569)

(5) は要求の文脈で、さらに *please*, *kindly* のどちらも共起可能である。では、同じように要求の文脈で使われる *kindly* と *please* の違いはどこにあるのだろうか? *please* と *kindly* が異なる振る舞いを見せる次の例を考えてみよう。

- (6) a. (*Please /??Kindly*) have some more cake.
 b. [to a child] If you like that book so much, why don't you (*please /??kindly*) take it home.

(6a) は例えば、話し手が自宅に友人を招いた際に、ホストとしてケーキをもっと勧めるような場面である。(6b) は話し手の自宅に遊びに来ていた知り合いの子供が、ある本を気に入っている様子なので、「もし気に入ったのなら持って帰ったら?」と勧めている場面である。

では (5) と (6) の違いは何であろうか。注意深く文脈を考察すると、話し手がする要求の、利益の方向性が違っている。(5) は話し手の利益になる要求であり、(6) は聞き手の利益になる要求である。これを念頭において考えてみると、*kindly* は「話し手利益」の状況にしか合わないが、*please* の場合、利益の方向性は中立、つまり語彙的意味としては規定されていないということがいえる。

しかし、ここで注意しておきたいのは、(7) と (8) の対立である。

- (7) Take one more step, *please*, and you will have saved our lives.
 (8) * Take one more step, *please*, and I'll shoot.

(7) と (8) を比較すると、前者は一步動く事で話し手聞き手両者の利益になる文脈であるが、後者はどちらの利益も含意されていない。ここからわかるのは、状況的に利益が全く含意されない場合には *please* は容認不可ということである。

今までの観察から明らかなのは、*please* の使用環境は、利益が含意される文脈で要求する場面に限られ、その利益の方向性は中立であるということになる。

2.3. 主観的判断

前節までで見たように、*please* は、利益の方向は中立であるが、必ず利益が含意される要求の文脈で使用される。しかし、次の例のように、同じ勧めの場面でも、容認性が異なる場合がある。

- (9) a. * Why don't you *please* put the meat on first.
 (Hofmann & Kageyama (以下 H&K) 1986:56)
 b. [to a child] "Listen, if you like that book so much why don't you *please* take it home."
 (cf. Konishi 1989)

(9a) は、肉を始めに乗せれば料理がうまくできるというアドバイスの状況で、(9b) は (6b) で見たように、ある本をすごく気に入って欲しそうにしている子供に、「持っていったら?」と勧めている状況である。また、次のような例もある。

- (10) a. * To stop the boat, *please* head up in the wind.
 b. *Please*, head up into the wind to stop the boat.
 (Geukens 1978:272)

(10a) はインストラクターが指導するような状況では容認不可だが、(10b) は指導の状況ではなく、私的状況なら容認可能という判断である。

これらの例は、a は聞き手の利益が客観的事実に基づくもので、b は話し手の主観的判断によるものという点で共通している。ここから、*please* は話し手の主観的判断による利益を含意することが分かる。

これを踏まえると、(11) の非容認性も説明可能で

ある。

- (11) a.* *Please* put the meat on first, so it will be done on time.
 b.* Why don't you *please* put the meat on first.
 c.* *Please* take 2 pills after each meal.

(H&K 1986:56)

(11a, b) は (9a) と同様に、肉を始めに乗せればうまいというアドバイスの状況、(11c) は毎食後に薬を2錠飲むようにという指示の状況である。これらはすべて客観的事実に基づく利益であるため、容認不可であるといえる。

ここまで、A&K (2002) に基づいて、*please* の使用環境から語彙の意味を抽出する過程をみてきた。本研究では、*please* の語彙の意味に関しては A&K (2002) の見解を受け入れ、さらに *please* の語用論的意味を追求することにする。

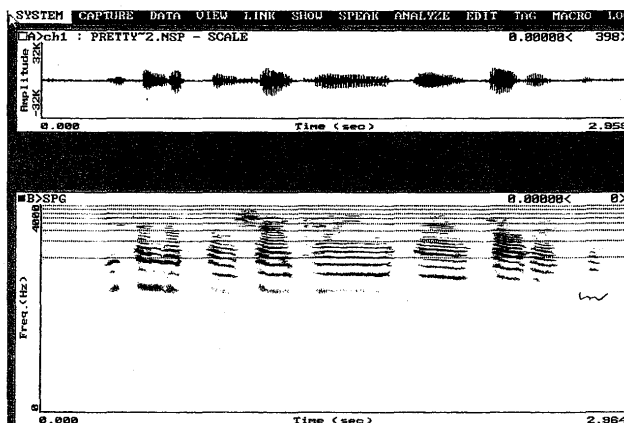
3. *please* の語用論的意味—アクセントの有無に焦点を当てて

この節では *please* の語用論的意味を考察するが、特に、話し手が発話内で *please* にアクセントを置いているかどうかに関心する。イントネーションについては、疑問文か肯定文かなど、文型の違いが影響するため、本研究では取り扱わない事とする。

3.1. アクセント (強勢)

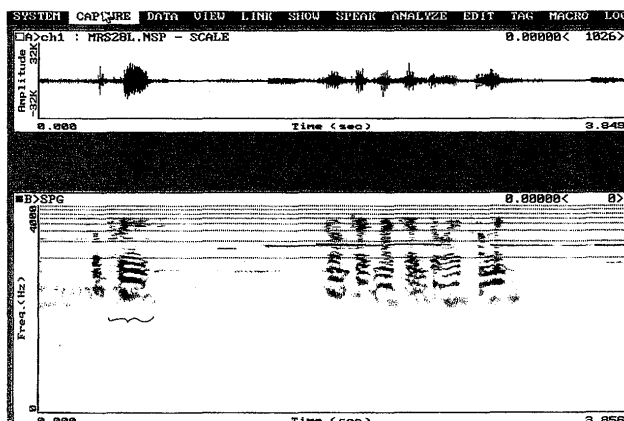
まず、本研究における分析方法として、アクセントがおかれているか否かに関して、サウンドスペクトログラム (声紋) 分析のうち、狭帯域サウンドスペクトログラムを使用する。³ *please* 部分のサウンドスペクトログラムの明瞭さ (濃淡)、発音の相対的な長さ、音の高さを基に判断した。(12) のようなアクセントが置かれていない語の典型的なグラフは、不明瞭、短い発音、低い音、となり、(13) のようなアクセントが置かれている語の典型は、明瞭、長い発音、高い音、となる。(cf. Fukumori 2002)

- (12) Could you send up some champagne and strawberries, *please*? (= (1))



- (13) So, *PLEASE*, don't take my kids away from me.

(Mrs. Doubtfire)



ここで考えておく必要があるのは、ある語にアクセントが置かれる際の話し手の意図である。先行研究で主張されているアクセントの機能を概観すると、以下のようなものがある。

- (14) a. 単語はある特定の状況において意味上重要なときアクセントを受け、特に重要でないときにはアクセントを受けない。

(片山・長瀬・長瀬 1994:31)

- b. 強勢のある語はすべて各々のメッセージの重要な部分として認識される。

(片山・長瀬・長瀬 1994:33)

- c. 文強勢というのは、話し手が強勢を置くに値する重要性があると考えている語に置かれる、とすることができるであろう。

(Gussenhoven 1983:81)

- d. 関心の焦点となっているところに強勢をおく

必要がある。

(Bolinger 1985:88)

e. 話し手の関心あれば、強勢あり。

(安井 1992:239)

これらの先行研究から、話し手は、ある語にアクセントを置く、つまり、明瞭に長く高く発音する事で、関心の焦点、重要性の認識を示しているといえる。これは、重要な情報であることを示すために、アクセントである重要な解釈を強調しているともいえる。

次節から *please* のアクセントの有無に焦点をしばり、アクセントが置かれる場合に、置かれない場合と比べて何が強調されているのかについて考察する。

3.2. アクセントが置かれない場合—GCI の解釈

3.1 でアクセントを置くことで重要性を強調するということを確認した。ここから、アクセントを置かない場合が、「通常」の解釈であると考えられる。Levinson (2000) に従って、この通常の場合に出てくる解釈を Generalized Conversational Implicature (GCI) と呼ぶことにする。

please の GCI を考える際に、有効であると思われる例がある。

(15) Pass the remoulade, *please*. (Sadock 1974:88)

(16) Chase: Who is The Batman, Edward?

Edward: Can't tell if you don't say *please*.

Chase: You're right, Edward. I didn't mean to be impolite. (Batman Forever)

Sadock は (15) を *Pass the remoulade* より丁寧であるとしている。(16) では、*please* を使わなかったことが *impolite* と考えられている。これらのことから、*please* に「ポライトネス機能」があると考えられる。ではこのポライトネス機能とはどのような機能なのだろうか？ (cf. Gordon and Lakoff 1971, Sadock 1974, Leech 1983, Stubbs 1983, Hofmann and Kageyama 1986, Brown and Levinson 1987 (以下 B&L))

先行研究では、この *please* のもつポライトネス機能を、要求文をより間接的にするといった間接性 (indirectness) で説明しようとするが、*please* の語彙に関

連させた詳しい説明はない。そこでなぜ *please* の使用が間接性に結びつくのかを、*please* の派生過程から考えてみることにする。

please が *if you please, if it please you* という表現から派生したことはよく知られている (cf. Quirk et al. 1985:572)。この2つのフレーズは、「もしよかったら／よろしければお願いします」といった意味で、要求の際に聞き手の意志をうかがう態度を示すという点で、聞き手に敬意を示しているといえる。角度を変えて考えると、聞き手に決断をゆだねる、つまり、断るという選択をしやすくするという点で optionality の程度を上げているともいえる。そしてこれが、より間接的な要求につながる。*please* の持つポライトネス機能はこの「聞き手への敬意の表示」、言い換えると「optionality の程度の高さ＝間接的な要求」からきていると考えられる。(cf. Leech 1983, Stubbs 1983, B&L 1987, House 1989:116, Arita 2001, Wichman 2002:3-4)

please が GCI として、「要求の際の聞き手への敬意の表示」というポライトネス機能を持っている事を確認するために、*please* にアクセントが置かれていない例を見ていくことにする。

(17) Could you send up some champagne and strawberries, *please*? (= (1))

(17) はホテルの特別客がフロントでルームサービスを頼む場面で、アクセントのない *please* が使用されている。この客はこの映画の中で、富豪だが紳士的で礼儀正しい性格の男性として描かれている。そしてここでも、紳士的で丁寧な態度で要求しており、「シャンペンとストロベリーを持ってきてくれますか？お願いします」と、相手に敬意を示していると考えられる。

(18) Get her back for me, *please*. (Pretty Woman)

(18) は社長が秘書に、今電話で話していた女性にもう一度つないでくれるように頼む場面である。話し手は (17) と同じ人物で、「彼女にもう一回つないで、お願い」と茶目っ気たっぷりに、かつ、秘書に敬意を示しながらの要求をしている。

- (19) All right, gentlemen. You heard the man. Please wait outside. (Pretty Woman)

(=(2))

(19) は社長の弁護士が社長の言葉を受けて、他の社員に会議室から出るようにいう場面である。「さあ諸君、聞いていただろう、外で待っていてくれるようお願いする」と、実際は上の立場の者からの要求なのだが、形式的にはあれ、聞き手である社員に敬意を示していると解釈できる。

- (20) Please drive up to the window, thank you. Smile, you're at Mr. Smiley's, that'll be four eighty-nine, please. (American Beauty)

(20) はファーストフードのドライブスルーで、店員が注文してくれた客に窓のところまで来てくれるように指示し、料金を知らせている場面である。「窓まで来てくれるようお願いいたします、ありがとうございます。はい、スマイル。スマイリーズです。4ドル89セントお願いします」と、買ってくれたお客さんに敬意を示しながら自分の要求をしている。

ここまでで、要求の文脈で *please* にアクセントが置かれない場合、語用論的に付加されるものがないので、話し手は *please* を「聞き手に敬意を示す」、つまり GCI の解釈で使用していることが確認できた。次節では、話し手が *please* にアクセントを置いた場合について考察する。

3.3. アクセントが置かれる場合

3.1. で、話し手はアクセントを置くことで重要性の認識を伝える、つまり、ある重要な解釈を強調するということをみた。ここでは、*please* にアクセントを置くことによって、*please* のどのような解釈が重要な情報として強調されるのかについて検討する。

アクセントが置かれた *please* の解釈に関して、(21) は重要な手がかりを与えてくれる。

- (21) Edward: Gentlemen? Would you mind leaving us, PLEASE?⁴
Thank you.
Vivian: People always do what you tell them to do?

(21) は、ホテルのペントハウスに宿泊している特別客の Edward が、営業終了後のホテルのバーで、自分のピアノを聞いていた従業員達に、出て行ってくれるようにいう場面での発話である。その Edward の言葉に対して、ガールフレンドの Vivian が *tell* を使っていることに注目したい。Edward の行為を *tell them to do*、つまり、「命じる」と解釈している。このことから、*would you mind ...?* とかなり丁寧な依頼文の使用にもかかわらず、アクセントが置かれた *please* を加えることで、依頼から命令、つまり強い要求の解釈が出てくるといえる。

- (22) Jordan: Will you marry me?

Maggie looks surprised.

Jordan: We can finally get up to Tahoe. Get married of the Nevada side, honeymoon and be back before we miss a case. What do you want me to do? Get down on my knees? What do you want me to say? We belong together. We're the same species.

Maggie: Jordan ...

Jordan: I'm not ...

Jordan takes her hand in his.

Jordan: You know I'm not very good at ... matters of the heart. I mean, the proverbial heart. PLEASE be my wife.

(City of Angels)

(22) は、Jordan が Maggie に結婚を申し込む場面である。一度、*Will you marry me?* と申し込んだが、すぐに O.K. をもらえなかったのもう一度申し込んでいる。Jordan の態度を見ると、一度目のプロポーズの後、説得に入り、より気持ちを込めて二度目の申し込みをしている。初めより結婚を申し込む要求が強く現れている。この例でも、*please* にアクセントを置く事で、強い要求の気持ちを表現しているといえる。

- (23) PLEASE, don't take my kids away from me.

(Mrs. Doubtfire)

(23) は離婚後の子供の親権を争う裁判で、父親が裁判官に自分から子供を取り上げないでほしいと願う場面での発話である。この父親は子供をととても愛していて、少しでも長く子供達とともに時間を過ごしたいという考えの持ち主である。その父親の心からの要求にアクセントつきの *please* が用いられている。これによって父親は、自分の要求の強さを裁判官に訴えていると考えられる。

(24) *PLEASE* don't pick it up. *PLEASE* don't. I'm not moving. (Pay It Forward)

(24) は話し手が、自分を銃で狙おうとしている相手に向かって、銃を拾わないでくれるよう頼む場面である。自分の命がかかっているため緊急の強い要求と解釈できるが、やはりここでもアクセントつき *please* が使用されている。

(25) Wait here, *PLEASE*. Watch her. (Pretty Woman)

(25) はホテルのマネージャーが、自分のホテルにはふさわしくないとされるストリートガールに向かって、その場で待っているようにいう場面である。続けて、受付嬢に見張っているように言っていることから、強い要求である事が分かる。

(26) Mrs. Doubtfire, *PLEASE* join us. (Mrs. Doubtfire)

(26) は雇い主である母親が信頼している家政婦に、夕食会と一緒に来てほしいと頼む場面である。一度頼んだ後、家政婦が用事があるため行けないと断ると、母親はそれをキャンセルして、と言った後、さらにこの言葉で強引に頼んでいる。この例でもアクセントつき *please* が強い要求を示していると解釈できる。

(21) - (26) で *please* にアクセントが置かれた場合の解釈をみてきたが、共通していえることは、強い要求の解釈で用いられているということである。アクセントがない場合は「もしよかったら／よろしければ、お願いします」という相手に敬意を示す解釈であったが、アクセントを置くことによって、*please* の語彙的意味である「要求」が強められ、「どうしても、お

願いたい」という強い要求の解釈になっていると考えられる。つまり、要求の解釈が重要な情報として強調され、強い要求という解釈が出てくるといえる。

3.4. 語用論的解釈

先行研究を調べてみると、アクセントに注目した研究に Hofmann and Kageyama (1986) (以後 H&K) がある。H&K は、(27) のように、立場が下の話し手が *please* にアクセントを置き、長く発音した場合、「懇願」になると分析している。次の例はそれぞれ、物乞いの場面、子どもが母親と一緒にいきたいと願う場面、囚人が開放して欲しいと願う場面である。

- (27) a. The beggar said, "My daughter, God bless you. You are very kind hearted. *PLEASE* give me your this colored shirt for my daughter. (attested)
Spk = beggar
b. *PLEASE* let me go with you, mummy. Spk = child.
c. Could you let me out, *PLEASE*. Spk = prisoner

ここで1つ指摘しておきたいのは、H&K は立場が下の話し手が *please* にアクセントを置いた場合にしか注目していないが、今までの例から分かるように、アクセントつき *please* は立場が下の話し手が使うとは限らないということである。(21) や (26) から明らかかなように、立場が上の話し手が使うこともある。そしてこれらに共通するのは、強い要求という意味である。

では、この「懇願」の解釈はどこから出てくるのだろうか。これは、「話し手の立場」という、語用論的問題が関係していると思われる。つまり、立場が下の者が強い要求をした場合の語用論的解釈は「懇願」であり、立場が上の者が強い要求をした場合の語用論的解釈は「命令」であると推測できる。(27) に対して H&K が「懇願」の解釈を与えていることと、(21) が特別客から従業員への「命令」と解釈される事から、この推測が正しいと考えられる。

これまでの観察から、*please* にアクセントが置かれた場合、共通する解釈は「強い要求」であることが明らかになった。そして、話し手の立場という語用論的

ホームレスからその家の主人への発話であり、どちらも話し手に相手に対して要求する権利はないと考えられる。

(37) Jordan: Will you marry me?

Maggie looks surprise.

Jordan: We can finally get up to Tahoe. Get married of the Nevada side, honeymoon and be back before we miss a case. What do you want me to do? Get down on my knees? What do you want me to say? We belong together. We're the same species.

Maggie: Jordan ...

Jordan: I'm not ...

Jordan takes her hand in his.

Jordan: You know I'm not very good at ... matters of the heart. I mean, the proverbial heart. PLEASE be my wife. (=22)

(38) PLEASE don't pick it up. PLEASE don't. I'm not moving. (=24)

ここで、アクセントが置かれた場合についても一度思い返してみると、*please* の語彙的意味である「要求」が強められ、「どうしても、お願いしたい」という強い要求の解釈になる、ということであった。上で挙げた例を見てみると、(37) では結婚を申し込むという話し手にとって相当重要な要求であり、(38) は、自分が撃たれそうになる状況で銃を拾わないよう頼む場面で、自分の命がかかっている緊急事態の要求である。つまりこれらは、*please* にアクセントを置くことで重要さや緊急さを示して要求を可能にしており、ここでの主張を裏付けているといえる。

このことを念頭において、もう一度 *kindly* と *please* の例を考えてみたい。

(39) a. The beggar said, "My daughter, God bless you.

You are very kind hearted.?? Kindly give me your this coloured shirt for my daughter." Spk = beggar

b. ?? Kindly let me go with you, mummy.

Spk = child.

c. ?? Could you kindly let me out, PLEASE.

Spk = prisoner

(40) a. The beggar said, "My daughter, God bless you. You are very kind hearted. PLEASE give me your this colored shirt for my daughter. (attested)

Spk = beggar

b. PLEASE let me go with you, mummy.

Spk = child.

c. Could you let me out, PLEASE.

Spk = prisoner (=27)

kindly は話し手利益の要求のときだけ使えることを 2.2. で確認した。(39) の例はすべて聞き手利益の要求であるが、(40) の *please* の例と比べると容認性はかなり低い。このことから、*kindly* は、話し手の利益が含意される文脈でも、話し手に要求する権利がないときには使用できないということが分かる。

また、次の例も考えてみよう。H&K によれば、(41) は通常の状況では、教授から学生には可能だが、学生から教授には不可能と判断される例である。

(41) Could you open the door, please?

[^{ok} from a professor to his/her student / * from a student to his/her professor] (H&K 1986)

この例の説明として H&K は、この発話が学生から教授に対して容認可能になるのは、学生がドアを開けてもらいたいときに、その学生が手に本を持っている場合、つまり学生が一時的に教授をコントロールできる立場に立つ場合であると説明している。しかし、このコントロールという概念は、話し手の立場が上という意味なのか、状況的に話し手に要求する権利が認められるという意味なのかあいまいである。しかし、要求する権利という概念で考えると、学生が手に本を持っているときには、ドアを開けてもらうという要求行為が正当性を持つため、立場に関係なく、要求する権利が認められる状況になる。つまり、(41) は話し手に要求する権利がある場合の *please* の例ということになり、今まで主張してきた、「話し手が要求する権利」という概念の裏づけになると思われる。

5. 結論

本研究では、*please* の多様な解釈のメカニズムを探るべく、*please* の語彙的意味と語用論的意味を区別し、語用論的意味に関してはアクセント付与と、話し手の「要求する権利」という状況的解釈に焦点を当てて考察してきた。

まず語彙的意味に関して、*kindly* との比較を基に、*please* が要求の意味を持ち、話し手が聞き手のどちらかの利益が含意される文脈でのみ使用される事を確認した。そして、その判断は話し手の主観に基づいており、*kindly* とは異なり、利益の方向性は中立的であった。

語用論的意味としては、アクセントを置かない場合が *please* の GCI で、要求の際の相手への敬意という解釈を持つことをみた。アクセントを置くことにより、要求の意味が強調され、強い要求の解釈になる。そして話し手は、この「要求の際の敬意」と「強い要求」の用法を、自分に要求する権利があるかどうかによって使い分けている。要求する権利があるときは、両方とも使用可能であるが、要求する権利がないときは、要求の重要性や緊急性を示すアクセントつきの *please* のみ使用可能であった。ここで、常識的に考えると、要求する権利がない時ほど敬意を表すべきだと考えられるのに、敬意を表すアクセントなしの *please* の使用例がないというのは興味深い。これは *please* のもつ「丁寧な要求」という GCI の解釈がアクセントによって消滅するのではなく、「強い要求」の解釈が上乗せされ、重要性や緊急性のために「強い要求」の解釈が優先して理解されると考えるのが妥当であろう。

語用論的意味として、アクセント付与だけでは完全ではないが、*please* の解釈の多様性を解明する第一歩になったと思われる。今後は *please* の文内位置による違いや、文全体のイントネーションとの関係、さらにはイギリス英語やオーストラリア英語等、他の言語社会での現象を課題にしたい。

参考文献

Arita, Y. (2001) A Comparative Study of Japanese and English Polite Expressions: With Special Reference to *Request*, *Tsukuba*

- English Studies* 20, 137-150.
- Arita, Y. and Kusayama, M. (2002) On the Flexibility of *Please*, *Tsukuba English Studies* 21, 79-99.
- Bolinger, D. (1986) *Intonation and Its Parts: Melody in Spoken English*, Stanford University Press, Stanford, California.
- Brown, P. and Levinson, S.C. (1987) *Politeness: Some Universals in Language Usage*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Fukumori, T. (2002) The Phonetic Analysis of 'Tsukasa' Accent, *Ninchi-kagaku Kenkyu* 1, 21-40. Muroran Ninchikagaku Kenkyukai.
- Geukens, S.K.J. (1978) The Distinction between Direct and Indirect Speech Acts: Towards a Surface Approach, *Journal of Pragmatics* 2, 261-276.
- Gordon, D. and Lakoff, G. (1971) Conversational Postulates, *Chicago Linguistic Society* 7, 63-84.
- Gussenhoven, C. (1983) Focus, mode and the nucleus, *Journal of Linguistics* 19:377-419.
- Hofmann, R. Th. and Kageyama, T. (1986) *10 Voyages in the Realms of Meaning*, Kuroshio, Tokyo.
- House, J. (1989) Politeness in English and German: the Function of *Please* and *Bitte*, *Cross-Cultural Pragmatics: Requests and Apologies*, Blum-Kulka, S. House, J. and Kasper, G. (Eds.), Ablex Publishing Corporation, Norwood, New Jersey.
- 片山嘉雄・長瀬恵美・長瀬慶来 (編). (1994) 『イギリス英語のイントネーション』 南雲堂.
- Konishi, T. (1989) *A Dictionary of English Word Grammar on Adjectives and Adverbs*, Kenkyusya Syuppan, Tokyo.
- Leech, G.N. (1983) *Principles of Pragmatics*, Longman, London.
- Levinson, S.C. (2000) *Presumptive Meanings: the theory of generalized conversational implicature*, MIT Press, Cambridge.
- Okazaki, M. (1998) *English Sentence Prosody: The Interface between Sound and Meaning*, Kaitakusha.
- Quirk, R. Greenbaum, S. Leech, G. and Svartvik, J. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman, London.
- Sadock, M.J. (1974) *Toward a Linguistic Theory of Speech Acts*, Academic Press, New York, San Francisco, London.
- Stubbs, M. (1983) *Discourse Analysis-The Sociolinguistics Analysis of Natural Language-*, Basil Blackwell, Oxford.
- Wichman, A. (2002) The prosody of Please-requests: a corpus based approach, Technical Papers, c/o Aimee Doggett, Research Secretary, Computing Department, Lancaster University, <http://www.comp.lancs.ac.uk/computing/research/ucrel/papers/techpaper/vol15.pdf>.
- 安井泉. (1992) 『音声学』 開拓社.

使用映画

- American Beauty* (2000) Dreams Works Pictures.
- Batman Forever* (1995) Warner Bros.
- City of Angels* (1999) Warner Bros.
- Mrs. Doubtfire* (1996) Twentieth Century Fox Film Corporation.
- Pay It Forward* (2001) Warner Bros.
- Pretty Woman* (1990) Touchstone Pictures.

註

- 1 本研究では6つのアメリカ映画から採取したデータを分析対象とした。これらの映画では現代社会が舞台となっており、日常的なアメリカ社会の特徴が反映され、日常英語表現が使用されていると判断した。本研究ではアメリカ英語を研究対象と位置づけたためアメリカ映画のみを選択した。従って、本研究結果とその他の地域の英語表現との整合性に関しては、今後の研究課題として残されている。
- 2 *please* にアクセントがある場合を *PLEASE* と表記する。アクセントとはここでは、語レベルの強勢(ストレス)ではなく、文レベルの強勢のことをさす。(cf. 安井 1992: 128, Okazaki 1998:8)
- 3 サウンドスペクトログラム(声紋)とは、音声を短時間周波数で分析し、その結果を目で見やすくした表示のことをいう。短時間周波数分析で、時間分解能に重点を置いて分析したものを広帯域サウンドスペクトログラム、周波数分解能に重点を置いて分析したものを狭帯域サウンドスペクトログラムという。今回は後者を用いる。グラフの横軸が時間、縦軸は周波数を示していて、サウンドスペクトログラムの色の濃い部分は、そこに音声信号の成分が集中している、つまり、明瞭に発音されていることを示している。また、サウンドスペクトログラムの長さは発音の長さ、高さは基本周波数の高低(音の高さ)を示している。
- 4 (21)に関しては、サウンドスペクトログラムではなく、パソコンに取り入れた音声の波形と、直接耳で聞いて判断した。
- 5 これは Levinson (2000) で解説されている *particularized conversational implicature* と同種の物と考えられる。